



紫香楽宮は、今からおよそ 1,250 年前の奈良時代中頃、滋賀県甲賀市信楽町の北部に聖武天皇が造営した都です。天皇は奈良の都(平城京)で政治を行なっていましたが、天平 12(740)年 10 月末に奈良の都を離れ、年末には奈良の北(今の京都府木津川市加茂町)とその周辺に新しい都を造り始めました。この都が恭仁京です。恭仁京の建設が進められている間、恭仁京から甲賀郡紫香楽村に通じる道(恭仁東北道)が開通し、天皇は紫香楽村に離宮を造り始めました。

天皇は、天平 14(742)年 8 月～9 月、同年 12 月～翌 15 年正月、15 年 4 月、同年 7 月～11 月初め、というように、この離宮へたびたび出かけ(行幸)、離宮の建設を励ましています。離宮というのは都とは異なり、天皇が保養などのため一時的に滞在する宮殿的施設で、紫香楽宮は離宮として造られ始めたのです。

このように、一方では恭仁京を造りながら、同時にもう一つの離宮・紫香楽宮の建設を進めたものですから、国家財政はたまりません。

天平 15(743)年の年末には、遂に、それまで足掛け 4 年間続いてきた恭仁京の建設事業が停止されることになりました。明けて天平 16(744)年になると、朝廷では難波宮を都にする準備を進め、早くも 2 月末には正式に難波を都と宣言しました。ところが、紫香楽宮の建設は引き続き進められていたのです。

天平 15(743)年 10 月に天皇は紫香楽宮で「大仏造頭詔」を発し、甲賀寺の建設と大仏造りに着手します。そして天平 16(744)年 11 月には甲賀寺で大仏の骨組みとなる体骨柱(中心柱)を建てる儀式が行なわれ、太上天皇(前天皇)も難波宮から紫香楽宮へ到着するなど、紫香楽は活気に満ちていきました。その勢いが持ち越された天平 17(745)年正月元旦、紫香楽宮は「新京」と呼ばれ、宮殿の門前に立てるのが習わしの大きな榎と檜が立てられました。ようやく、紫香楽宮は正式な都になったのです。

しかし、4 月になると、紫香楽宮や甲賀寺周辺の山々でしきりに火災が起こりました。火災がおさまると、今度は美濃国(岐阜県)で起きた大地震の余震と思われる地震が相次ぎました。これらが原因となって、5 月には早くも都が奈良(平城京)へもどってしまいました。紫香楽宮は、このように数年間めぐるしく平城京→恭仁京→難波宮→紫香楽宮→平城京と都が移り変わった時期に、極く短期間ですが光を放って存在した都であったのです。



0001\_紫香楽宮



0002\_紫香楽宮



0003\_紫香楽宮



0004\_紫香楽宮



0005\_紫香楽宮



0006\_紫香楽宮



0007\_紫香楽宮



0008\_紫香楽宮



0009\_紫香楽宮



0010\_紫香楽宮



0011\_紫香楽宮



0012\_紫香楽宮



0013\_紫香楽宮



0014\_紫香楽宮



0015\_紫香楽宮



0016\_紫香楽宮



0017\_紫香楽宮



0018\_紫香楽宮



0019\_紫香楽宮



0020\_紫香楽宮



0021\_紫香楽宮



0022\_紫香楽宮



0023\_紫香楽宮



0024\_紫香楽宮



0025\_紫香楽宮



0026\_紫香楽宮